

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

日本の「常識」、再考を願う！

評論家の竹村健一氏が雑誌やマスコミでよく使う言葉に、「日本の常識・世界の非常識」というのがある。一々「ごもつとも」と、テレビに向かって肯（うなず）いてる小市民であるが、この「常識」という言葉、今、実に蔑ろ（ないがしろ）にされている感が強い。

竹村氏の言う「常識」とは意味合いが若干異なるが、常識の中に、「礼儀」「作法」「慣習」「しきたり」「教養」「マナー」...こんな言葉を含めるとすれば、今日の日本の中で、正に「常識」なるものに大いなる異変が起こりつつある。つまり嘗て（かつて）あったはずの常識なるものが全く通じないし、当たり前が当たり前でなくなっている。しかもこの傾向は、年齢の老若関係なく、また学歴、収入の高低、地域の別なく、全日本的に蔓延しているようで、社会学者の如く、時代変化の一現象というべきか、善悪の判定は別として、何とも摩訶不思議な国になりつつある。

旅館や料亭、もちろん家庭にも「日本間」がある。日本間には必ず上座・下座が決まっている。もっと言えば日本間に限らず、会議室や応接室にも、自動車にも、エレベーターの中にも上座・下座の区別があるについては、これぞ究極の「日本の常識」である。そんなことお構いなしに、遅れて入ってきた人が一言の礼なく、どかどかと上座に鎮座するに至っては、開いた口が塞（ふさ）がらない。

セミナーや会議、話す方も聞く方も、もちろん真剣勝負。そんな時必ずと言っていいかもしれないが、携帯電話の呼び出し音。あれほど何回も注意したにも拘らず、日本語が通じない輩がいる。増しては「もしもし」なんて、電話に出る奴がいる。日本語が通じないのだから、英語か北京語と思いきや、「もしもし」である。

電車内や交通のマナーが相変わらず悪い。道をゆずらないマイペース運転、方向指示器を出さないで突然方向転換をするおばさん、馬鹿丸出しで深夜騒ぎまくっている暴走族、狭い電車内で無駄に伸びきった長い足、人前で平気で化粧する若い女の子、うるさいし、危ないし、汚いし、邪魔だし、...、あの道路や電車はお前のものか？と言いたくもなる。

時代がどう変わろうと、やはり「嘆かわしい」と思っている。「常識」という言葉は、身上の人に対する敬意、年長者への思いやり、周りの人への配慮、環境や社会に対する心配りから成り立っている。これが美しい日本の風土や歴史に支えられ、日本人としての「プライドと教養の証」として、大きな誇りだったはずである。教養のかけらもない者が、人の上に立てない歴史的証明があるように、日本人としての「誇り」を自ら失いつつある今、世界に向けての貢献など、出来る筈がない。まずは、日本人としての誇りあるアイデンティティを、常識を再考することで、見つめ直してみたいものである。